

第3章



海外留学

データからみた現状と課題

動き出す大学生の海外留学

1. 大学からの留学生送り出し

◆海外への留学生送り出しは進んでいるのか

1-1 留学生送り出しの方針

1-2 留学生送り出しの課題

2. 海外留学の現状と課題

◆海外留学を促進させるためには

2-1 留学を決断するときの阻害要因

2-2 留学中の苦勞

2-3 留学経験の仕事での活用状況





動き出す大学生の海外留学

Benesse教育研究開発センター 研究員 樋口 健

2校に1校の割合で

「海外留学を拡充する」方針

近年、全国の大学で学生の海外留学を拡充する検討が進められている。ベネッセ教育研究開発センターが2009年に実施した調査では、「海外に留学する学生を増やす方針に基づき、実行策を検討している」との比率が50.1%とほぼ半数であった(図3-1-1)。中でも国立大学の回答は実に8割と高い比率である。公立大学、私立大学の比率はそれぞれ5割弱であり、2校に1校の割合で海外留学の拡充が進められている。注力していきたい留学の形態としては、私立大学では「英語力・国際体験育成を目的とした短期留学」、国立大学では「海外提携校との交流を目的とした1年程度の交換留学」であった(図3-1-2)。

留学への決断を阻害する障壁は何か

このように大学在学中の学生の海外留学促進が進められつつある。しかし一方で、学生個々人が実際に海外留学に出かけるには、いくつかの克服すべき課題がある。大学側の見方によれば「経済的な問題」、「奨学金が不十分」、「就職活動とのかねあい」などである(図3-1-3)。特に国立大学ではその認識が強い。一方、個人側から阻害要因を見てみると、留学経験者においても、留学を断念した者からみても留学費用が大きな阻害要因となっている(図3-2-1)。留学経験者と断念した人の違いは資金を工面できたかどうかであり、奨学金の充実が留学生送り出しに向けての最も重要な課題といえる。

費用面の課題以外では、大学側の意識としては、私立大学では「学生の海外への興味・関心が低下」、公立大学では「信頼のおける海外提携校・協定校の開拓が難しい」などが顕著である(図3-1-3)。その一方で個人の側では「語学力不足」が、留学の決定を左右する要因になっていた(図3-2-1)。既に現在、国の教育改革テーマの一つとしても検討されているが、大学以前の段階での実践的な語学教育の充実、さらには大学入試における英語科目の改革が、一層必要になってくる。

「将来に生きる」留学経験とは

～ギャップタームの可能性～

大学が進めたい海外留学の形態は多様でありその期間も様々である。個人の側からみて、その後の人生、特に仕事に役立つ留学の経験、期間は実際にどのようなものか。経済産業省からの受託研究の結果によれば、留学を経験した社会人が「仕事で活用できている」として挙げている留学経験は「様々な背景や価値観を持つ人たちと協力する力」、「国際感覚」、「自ら行動する力」、「語学力」であった(図3-2-4)。留学の期間については3カ月程度でも初期の国際経験として、将来に役立つ何らかの効果をもたらす可能性が示唆されている。

現在、大学の秋季入学が社会的な課題として議論されているが、グローバル人材育成の「導入教育」として、ギャップタームの短期留学、海外ボランティアなどの有効性も感じさせるものといえよう。

1. 大学からの留学生送り出し

1-1 留学生送り出しの方針

半数の大学が、留学生の送り出しを強化の方針。
国立大学では8割にのぼる。

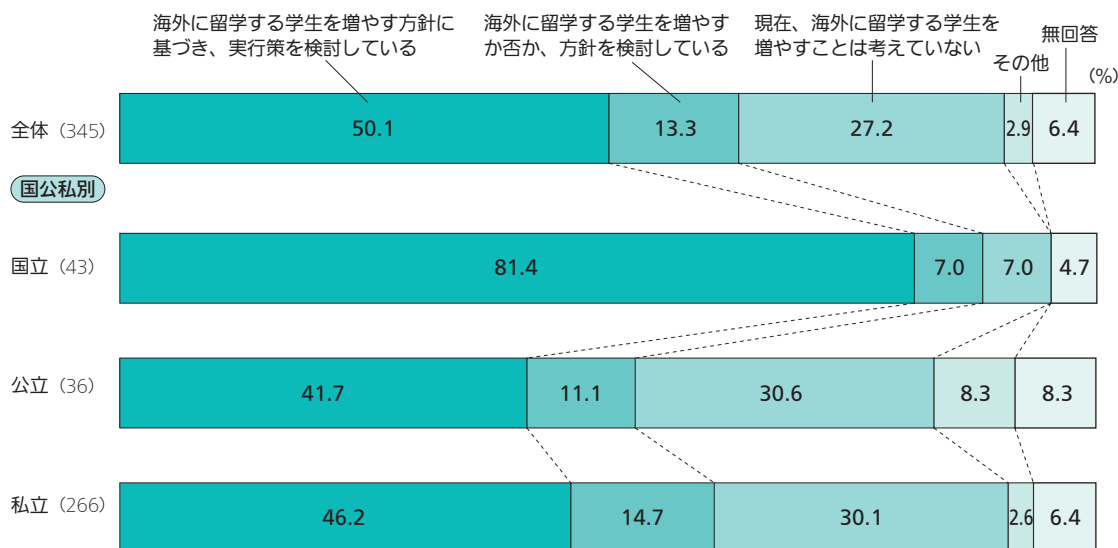
留学生送り出しの検討状況については、全体で、50.1%の大学が「海外に留学する学生を増やす方針に基づき、実行策を検討」していた。特に、国立大学は公立・私立大学よりも留学生の送り出しに前向きであり、81.4%と高い割合であった（図3-1-1）。

また、今後注力したい留学生送り出しの形態は、「英語力・国際体験育成を目的とした短期留学」（77.2%）や、交換留学制度による「海外提携校の交流を目的とした1年程度の交換留学」（71.2%）が中心である。前者は特に私立大学での比率が高く（80.9%）、後者では国立大学の比率が高い（81.6%）（図3-1-2）。

Q 貴大学の国際化の一環として、留学生の送り出しに関しては現在どのようにお考えですか。

図3-1-1 留学生の送り出し方針

英語担当教員責任者



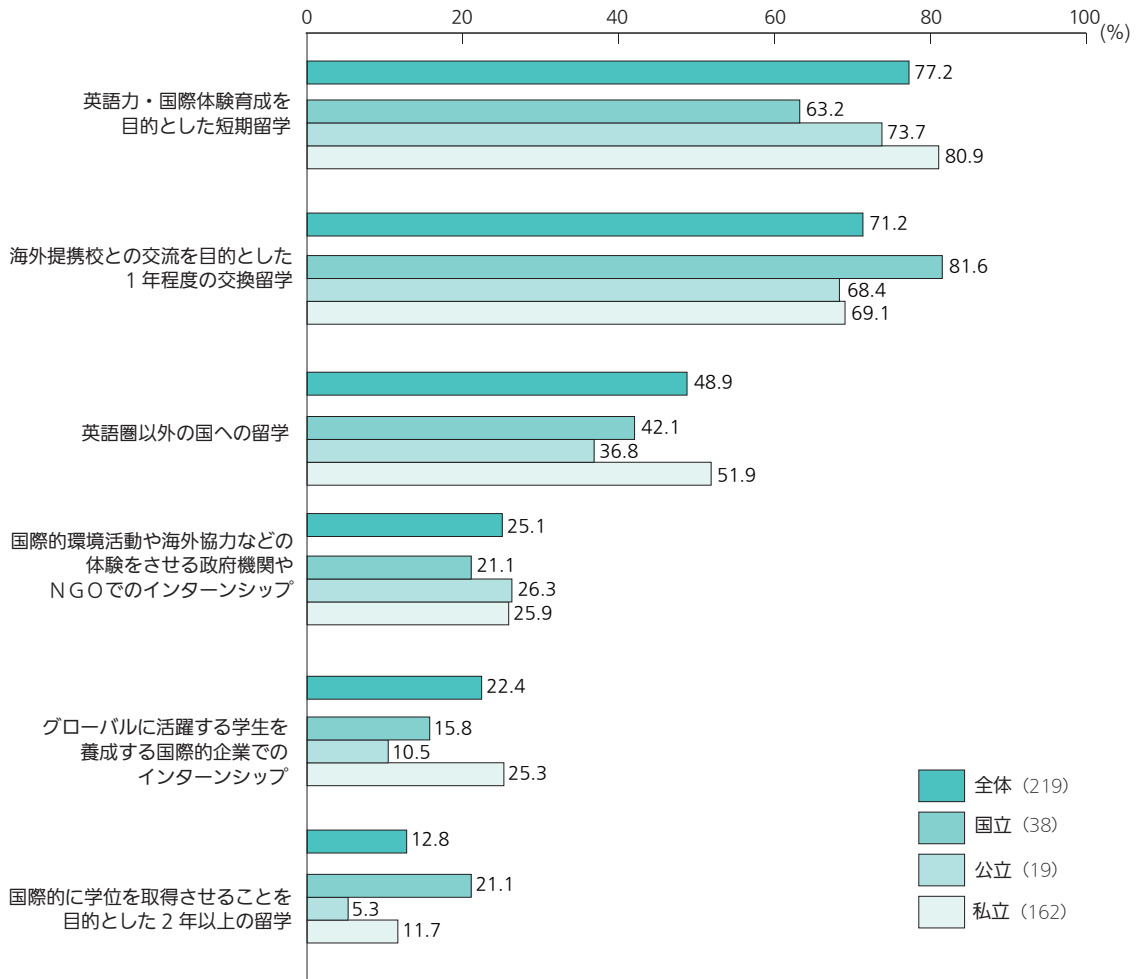
注) 対象は、英語担当教員責任者345人。()内はサンプル数。
「大学における英語教育の改革等に関する調査」(2009)



Q 貴大学で今後注力していきたい留学生送り出しの形態は何でしょうか。

図3-1-2 今後注力したい留学生送り出しの形態

英語担当教員責任者



注1) 複数回答。

注2) 対象は、前頁図3-1-1「留学生の送り出し方針」で、「海外に留学する学生を増やす方針に基づき、実行策を検討している」または「海外に留学する学生を増やすか否か、方針を検討している」とした219人。()内はサンプル数。

注3) 公立大学のサンプル数は19件と少数であり、ここでは参考値として提示する。

「大学における英語教育の改革等に関する調査」(2009)

1. 大学からの留学生送り出し

1-2 留学生送り出しの課題

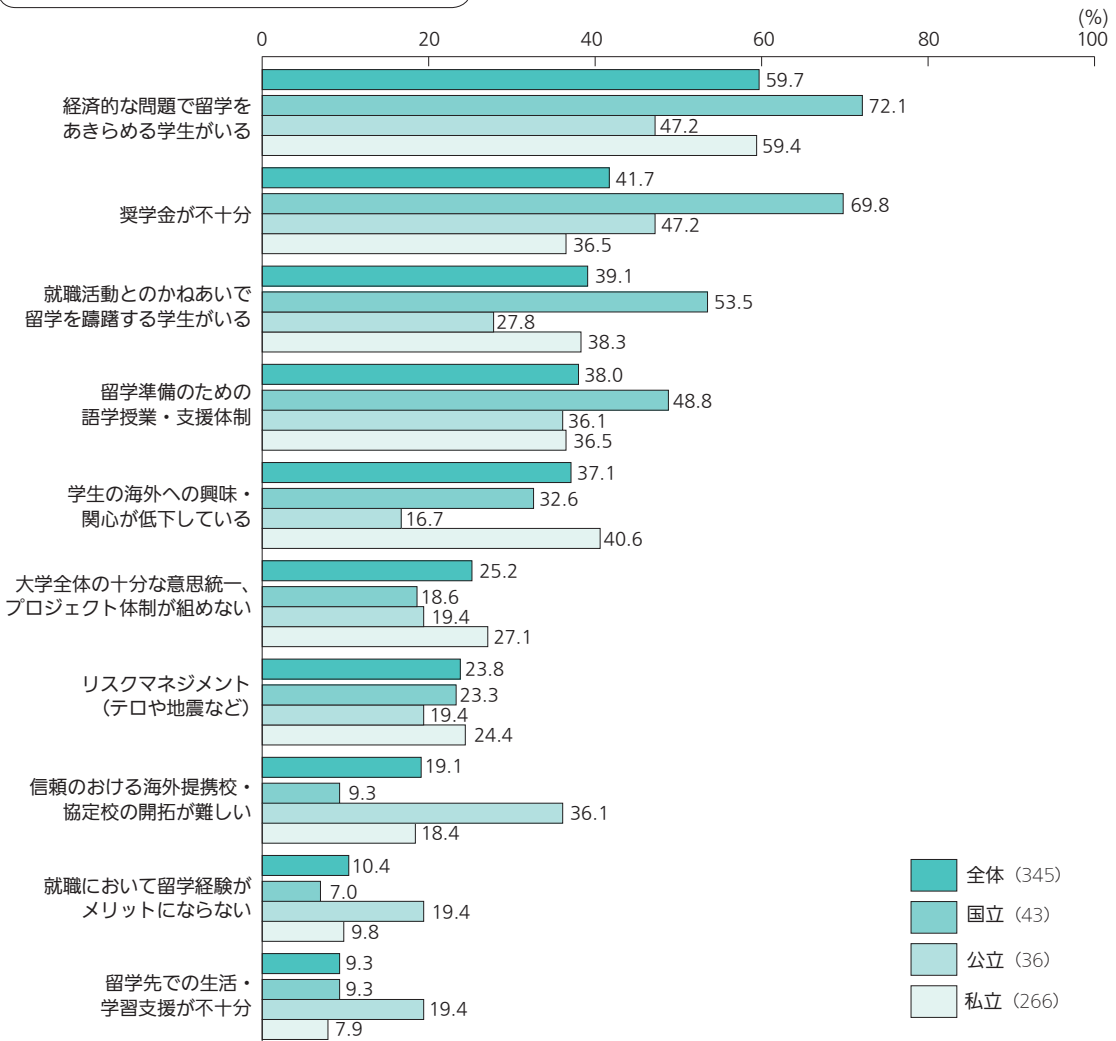
学生の経済的な問題に対する支援が重要な課題。

一般的に「経済的な問題で留学をあきらめる学生がいる」(59.1%)の回答が多い。とりわけ国立大学では顕著であり、72.1%に達している。国立大学では、経済的な問題の他、「奨学金が不十分」(69.8%)、「就職活動とのかねあいで留学を躊躇する学生がいる」(53.5%)が公立、私立大学を大きく上回っている。私立大学では「学生の海外への興味・関心が低下している」(40.6%)、公立大学では「信頼のおける海外提携校・協力校の開拓が難しい」(36.1%)の回答が相対的に多い。

Q 留学生送り出しの貴大学にとっての課題は何でしょうか。

図3-1-3 留学生の送り出しの課題

英語担当教員責任者



注1) 複数回答。 注2) 対象は、英語担当教員責任者345人。()内はサンプル数。
「大学における英語教育の改革等に関する調査」(2009)



2. 海外留学の現状と課題

2-1 留学を決断するときの阻害要因

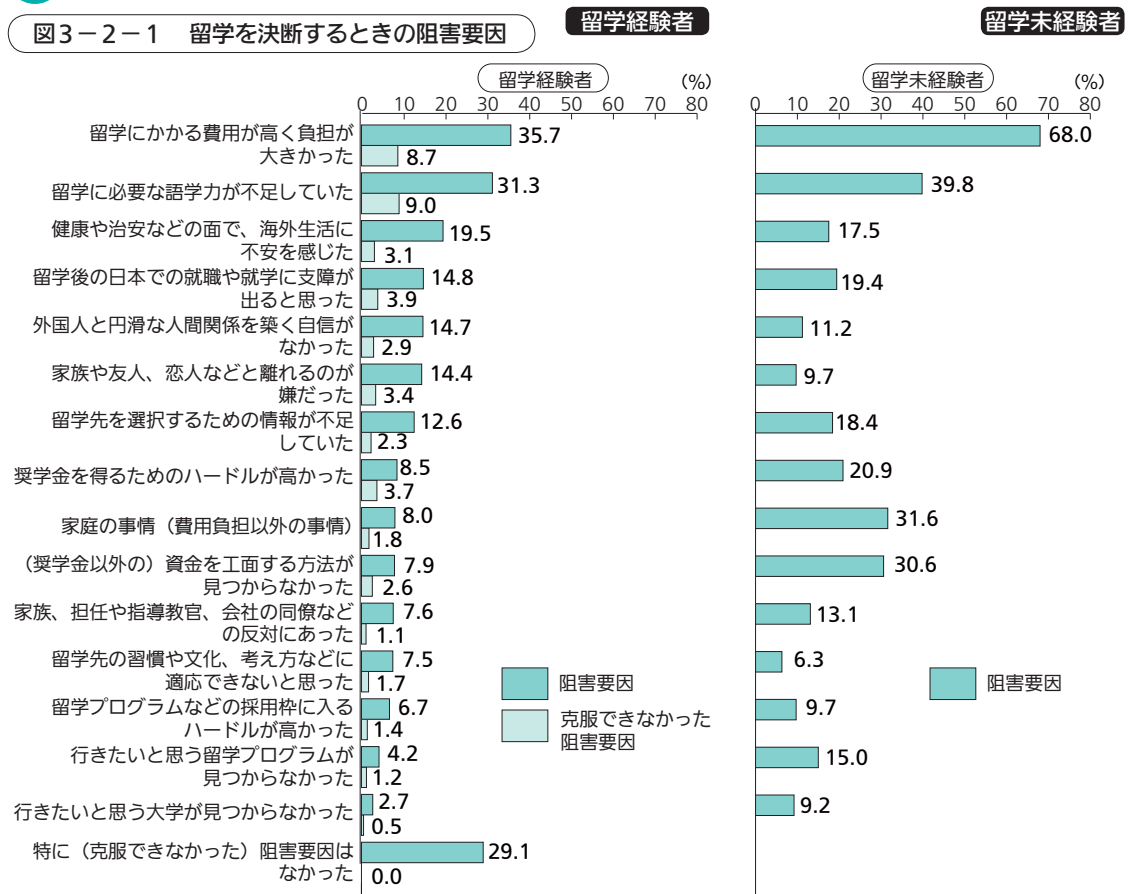
「お金」と「語学力」が海外留学の高い障壁に。

留学経験者も留学を断念した人も第一に費用負担に苦勞を感じており、海外留学の大きな阻害要因となっていた（図3-2-1）。資金調達の実態として、留学の形態を問わず、家族の援助、自費が中心であり、大学にたよらない留学の場合、奨学金の利用も2割に満たないのが実態である（図3-2-2）。実際、留学未経験者の中では、「（奨学金以外の）資金を工面する方法が見つからなかった」（30.6%）、「奨学金を得るためのハードルが高かった」（20.9%）を留学を断念した理由としてあげる割合も、大きい。また、留学前の語学力の獲得も重要な留学の決定要因であり、これらの課題がある程度クリアできないと留学には踏み切れない場合も多い。

Q 【留学経験者】 あなたが留学を決断するのに阻害要因として感じたことは何でしたか。また、その中で克服できなかった阻害要因はありましたか。

Q 【留学未経験者】 あなたは、なぜ留学を断念したのですか。

図3-2-1 留学を決断するときの阻害要因



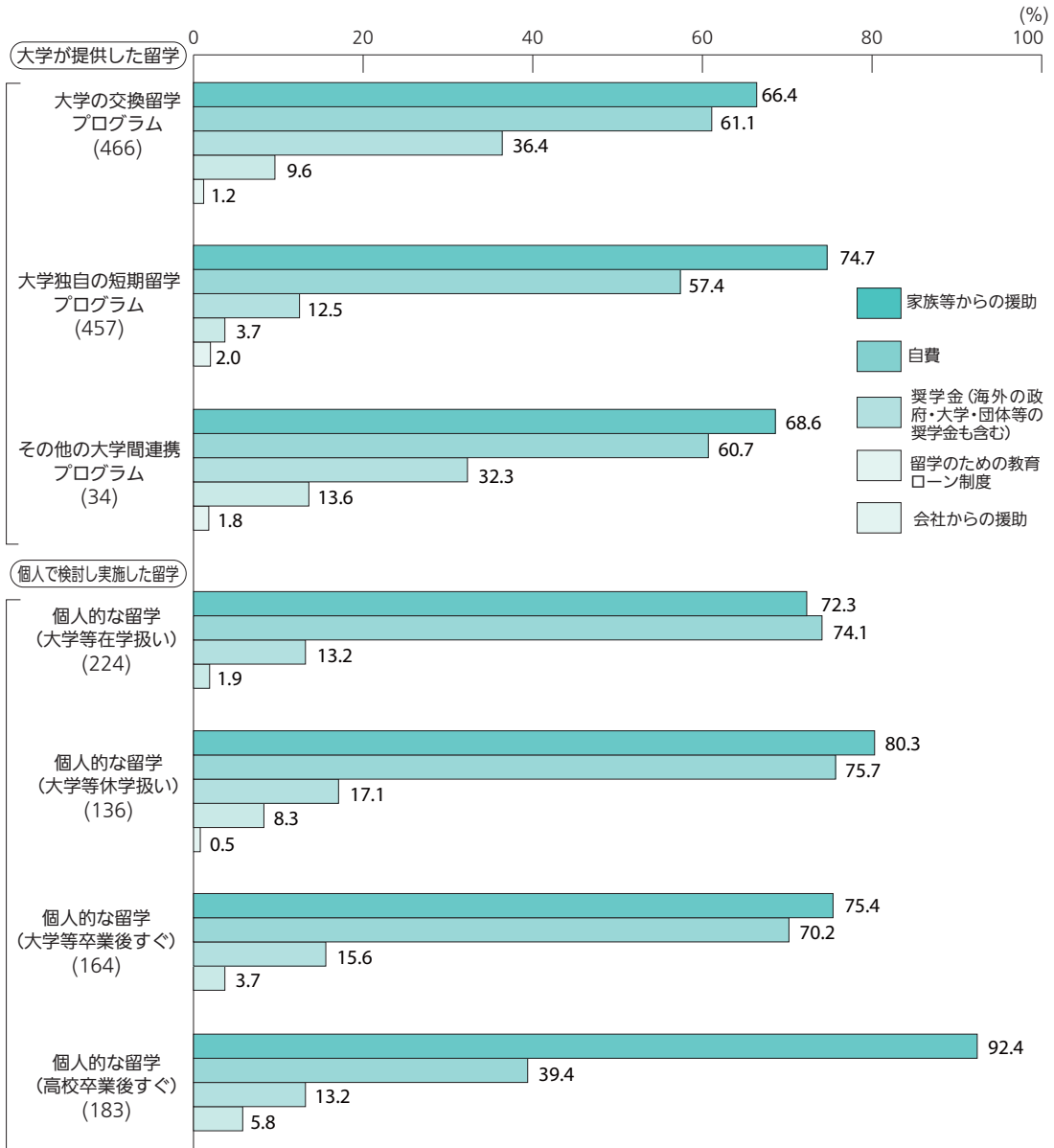
注1) 複数回答。注2) 対象は、10年以内の留学経験者2,150人、10年以内に関心を持ち情報収集をしたが留学しなかった留学未経験者206人。注3) グラフの出典となる調査は、経済産業省の委託でおこなった。対象は調査実施時点（2009年）から過去10年以内の留学経験者で大学在籍時の留学（6割）だけでなく、高卒後すぐの留学、社会人の留学など（4割）も含まれている。したがって、この調査結果は大学からの留学にとどまらず、個人側からみた海外留学の諸課題に関する一般的な状況を示している。利用制約があり詳細集計はできないが、個人からみた留学の障壁や促進の課題を示す希少なマクロデータであり、考察の手掛かりとして提示した。

「留学に関するアンケート調査」『留学生・海外体験者の国外における能力開発を中心とした労働・経済政策に関する調査研究』（2009年、経済産業省受託研究）

Q あなたはどのようにして留学のための資金を調達しましたか。

図3-2-2 留学のための資金調達の方法（留学形態別）

留学経験者



注1) 複数回答。

注2) 対象は、留学時期が「高校卒業後すぐ」「大学在学中」「大学卒業後すぐ」のいずれかに該当する留学経験者1,664人。()内はサンプル数。「留学に関するアンケート」「留学生・海外体験者の国外における能力開発を中心とした労働・経済政策に関する調査研究」(2009年、経済産業省受託研究)



2. 海外留学の現状と課題

2-2 留学中の苦勞

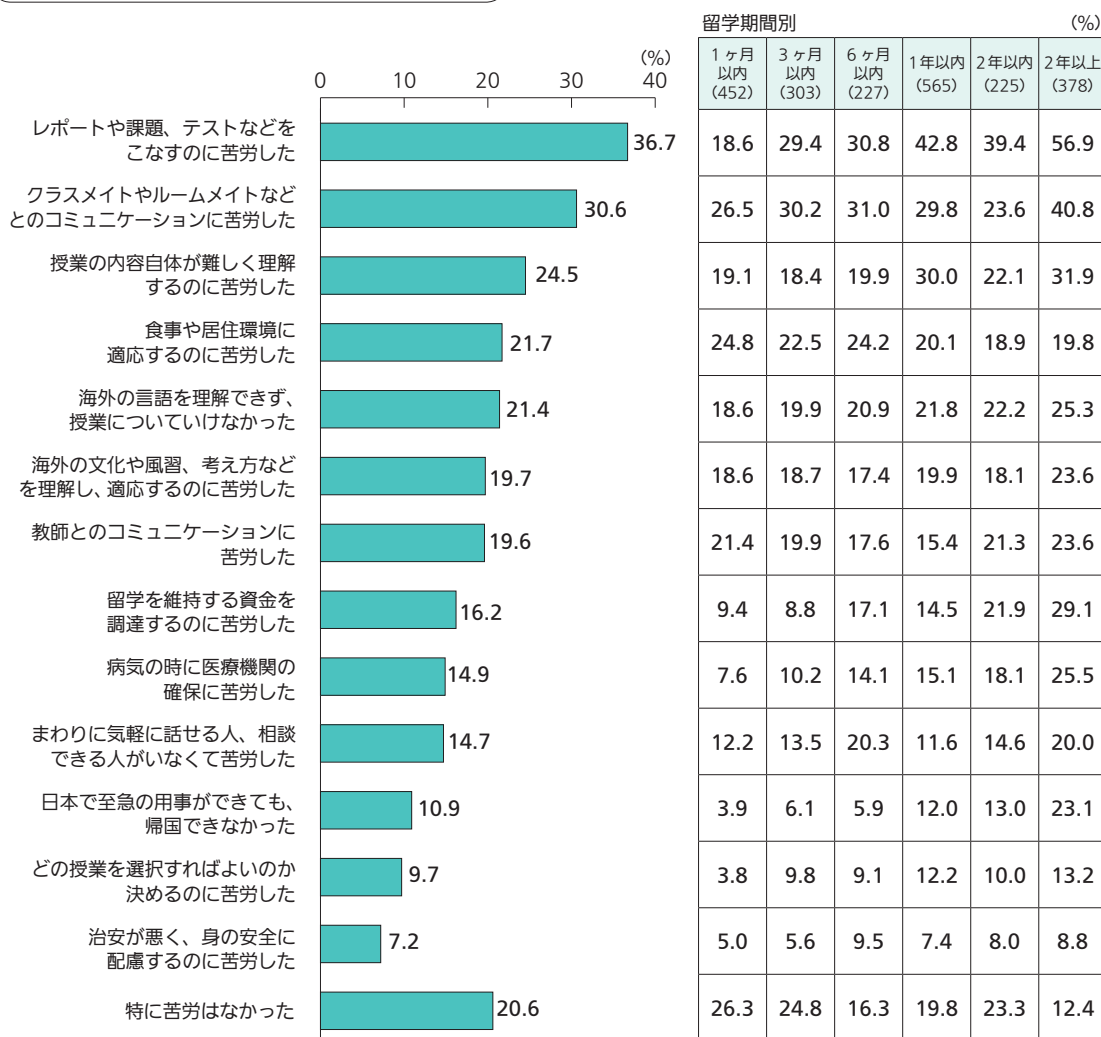
留学先の大学での授業・課題への対応に苦勞

留学中の苦勞としては、「レポートや課題、テストなどをこなす」こと（36.7%）、「クラスメイトやルームメイトなどとのコミュニケーション」（30.6%）、「授業を理解する」こと（24.5%）に大きな苦勞を感じている。特に前者については、留学期間が長くなると次第に割合が増加する傾向にある。一方、「食事や住居環境に適應するのに苦勞した」との比率は全体で21.7%であるが、特に短期での留学者の割合が高い。

Q あなたは留学中どのような苦勞を経験しましたか。

留学経験者

図3-2-3 留学中の苦勞(全体・留学期間別)



注1) 複数回答。

注2) 対象は、10年以内の留学経験者2,150人。

『留学に関するアンケート調査』『留学生・海外体験者の国外における能力開発を中心とした労働・経済政策に関する調査研究』(2009年、経済産業省受託研究)

2-3 留学経験の仕事での活用状況

異文化の中での人間関係、国際感覚、行動力、語学力がその後に活きている。
ただし3ヶ月以上の期間が必要。

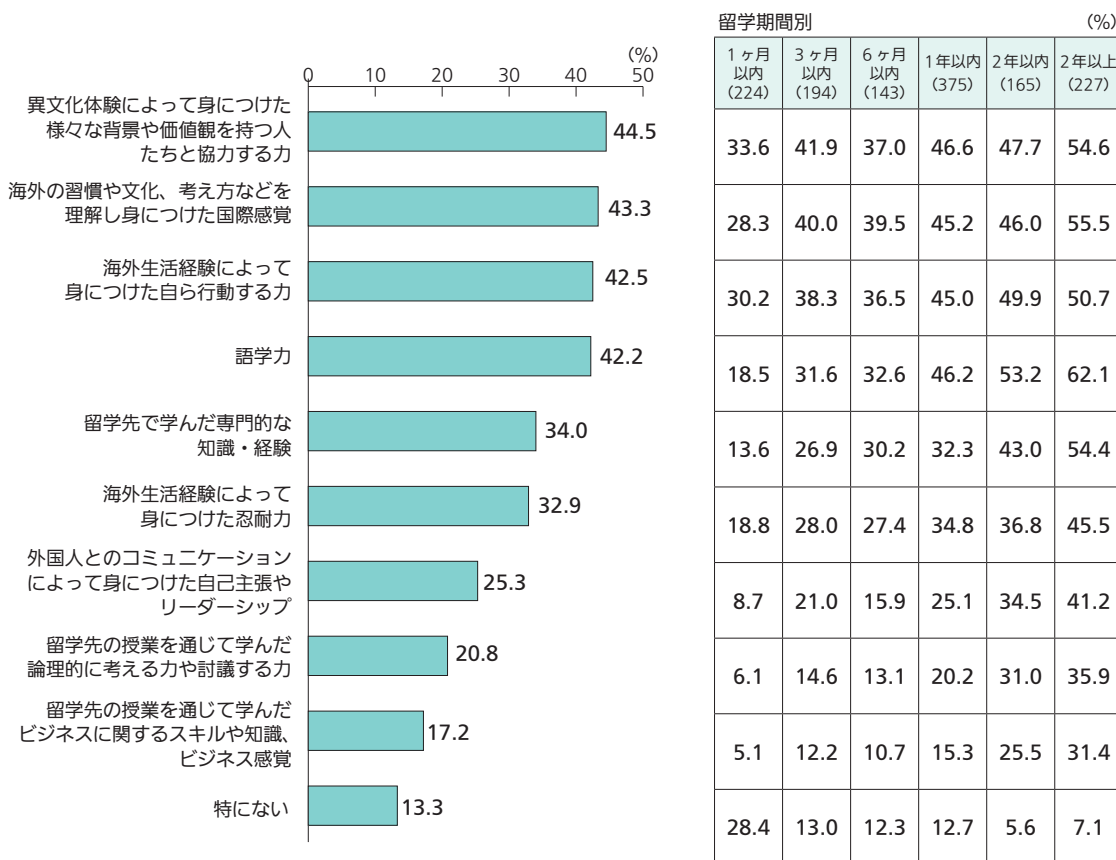
留学経験が仕事に活きているかについては、「異文化体験によって身につけた様々な背景や価値観を持つ人たちと協力する力」(44.5%)、「海外の習慣や文化、考え方などを理解し身につけた国際感覚」(43.3%)、「海外生活、経験によって身につけた自ら行動する力」(42.5%)、「語学力」(42.2%)の回答が多い。これらの比率は、留学期間が長いほど高くなる傾向にある。

一方、「特にない」との比率は「1ヶ月以内」で3割弱であり、「3ヶ月以内」より15ポイント以上高く、「2年以内」より20ポイント以上高い。留学経験をその後に何らかの形で活かすには、少なくとも3ヶ月程度の期間は必要かもしれない。

留学を経験していない周囲の人と比べ、あなたが「身につけている」、「どちらかといえば身につけている」、と回答したものに関して、現在のあなたの仕事に活かすことができていると思うものは何ですか。

留学経験者

図3-2-4 仕事での留学経験の活用状況(全体・留学期間別)



注1) 複数回答。

注2) 対象は、「周囲の人と比べて身につけていると思うこと」で、いずれかに「身につけている」、「どちらかといえば身につけている」と回答した1,328人。

「留学に関するアンケート調査」『留学生・海外体験者の国外における能力開発を中心とした労働・経済政策に関する調査研究』(2009年、経済産業省受託研究)

